

鉄器時代の南レヴァントにおける 手打ち太鼓奏者土偶とその他の楽師土偶の関係

杉本 智俊

The Relationship between Frame-Drum-Player Figurines and Other Musician Figurines
in the Southern Levant during the Iron Age

David T. SUGIMOTO

筆者は、これまで南レヴァントから出土する手打ち太鼓奏者土偶の性格を解明するため、当時の手打ち太鼓の用法に注目してきたが、もしこれらの土偶が楽団を形成する土偶群の一部であるとするなら、そのような試みは意味を失ってしまう。それゆえ、本論では、南レヴァントから出土するその他の楽師土偶のカタログを作成し、それらが手打ち太鼓奏者土偶と比べて極端に少ないこと、また、その少数の例はほぼすべて前7世紀以降のフェニキアとエドム地域に限定されており、男性の例も見られることを示した。その結果、少なくともイスラエル、ユダ、トランスヨルダンの地域では、手打ち太鼓奏者土偶は楽団の一部ではなく、単独で用いられたこと、一方、フェニキアでは、前7世紀以降楽師土偶が楽団へと発展する別の展開があったことを論じた。さらに、キプロス島の土偶を調べると、前6世紀を中心に男女の各種楽師土偶が均等に出土しており、フェニキアで起こった変化のさらなる発展を反映していることを示した。

キーワード：土偶、音楽、アスタルテ、南レヴァント、キプロス

In order to clarify the nature of female frame-drum player figurines from the southern Levant, it is crucial to understand whether they were used alone or as parts of an orchestra. In this article, other musician figurines from the southern Levant were catalogued, revealing that they are considerably rarer in comparison to the frame-drum players and that those few examples are limited to the Phoenicia and “Edom” areas after the seventh century B.C. Thus, at least in Israel, Judah and Transjordan, the frame-drum player figurines were used alone, while in Phoenicia there was a separate development toward orchestra figurines. In Cyprus, various male and female musician figurines are found consistently from the sixth century onwards, which may reflect the further development of the situation in Phoenicia.

Key-words: Figurines, Music, Astarte, southern Levant, Cyprus

序論

筆者はこれまで南レヴァント¹⁾から出土する円盤を持った女性土偶の分析を試み、これらは「手打ち太鼓」奏者で、アスタルテ女神の戦神としての側面を表現していることを指摘してきた(図1)²⁾。しかし、南レヴァントから出土する土偶のなかには他の楽器を構えたものも見られ、特にキプロスのフェニキア人遺跡と考えられる所からはさまざまな楽師土偶が出土している。もしこれらの手打ち太鼓奏者土偶が単独で用いられたのではなく、楽団を表現する土偶群の一部であったとするなら、当時の手打ち太鼓の用法や意義からこれらの土偶の役割を考える試みは無意味ということになりかねない。

そこで、本論では、手打ち太鼓奏者とその他の楽師土偶

の関係を検討することから、これらの手打ち太鼓奏者土偶が元来南レヴァントでは単独で用いられていたこと、時代とともにその性格が変わり、後の時代のフェニキアでは異なる役割が与えられるようになったことを示したい。具体的には、まず第1節でこれらの手打ち太鼓奏者土偶を戦神としてのアスタルテ女神と関連づけた根拠を整理し、これらが楽団の一部であった場合の問題点を明確にする。その上で第2節では、南レヴァントから出土する他の楽師土偶を検討し、手打ち太鼓奏者土偶が特別な位置を占めていたことを確認する。さらに、キプロスから出土する楽師土偶についても検討を加え、この種の土偶の発達史のなかに位置づけ、これらの土偶の果たした役割について再考することとしたい。



図1 円盤（手打ち太鼓）を持った女性土偶
 a. 板状土偶 (Hazor II, pl. 76:12) ; b. 柱状土偶 (C. Myers 1991: 20)

1. 手打ち太鼓奏者土偶と戦神としてのアスタルテ

筆者はこれらの円盤を持つ女性土偶は手打ち太鼓奏者であると理解している。「手打ち太鼓」³⁾は、旧約聖書で *toph* という単語で表現されている楽器で、一般に「タンバリン」と訳されているが、西洋音楽の伝統のように枠の周囲に小型の金属製のシンバルはついておらず、大きさにもさまざまなヴァリエーションがある。

これらの手打ち太鼓奏者土偶に対する解釈には大きく2通りあり、恍惚の豊饒祭儀で用いられた楽団の一部を表すものだとする説と戦いから帰ってきた兵士を歓迎する女性たちを表すものだとする説である。前者の立場の根拠としては、この種の打楽器には感情を盛り上げる性格があり、のちのローマ時代の豊饒女神（キュベレなど）のなかに手打ち太鼓をもって描かれるものがあることが指摘されている（例えば、Hillers 1970 参照）。また、旧約聖書や考古遺物からも鉄器時代の南レヴァントに楽団が存在したことが知られている。一方、後者の根拠としても、旧約聖書の中に凱旋兵士を女性たちが手打ち太鼓と踊りで迎え入れたという記事が複数存在する⁴⁾。

筆者は、すでにこれらの旧約聖書の記事を分析し、前2千年紀末から前1千年紀中葉のイスラエルにおいて、手打ち太鼓には明確に異なる二つの用法があったことを示した

（杉本 2001: 153-157）。手打ち太鼓が複数の他の楽器とともに記される場合は、常に宴会か礼拝のために、奏者の性別は明示されていない（宴会：創 31:27; イザ 5:12; 24:8; ヨブ 21:12; 礼拝：サム 10:5; 「サム 6:5; I 歴 13:8; 詩 81:3; 149:3; 150:4）。それに対して、手打ち太鼓が単独あるいはもう一つの楽器とだけ用いられる場合は、常に凱旋兵士を迎える場面で、奏者は女性であることが強調されている（出 15:20 [2回]; 士 11:34; Iサム 18:6; イザ 30:32; エレ 31:3; 詩 68:26）。同様の分析を行なったポエティヒ (Poethig 1985) も、後者を指して古代イスラエルには「勝利の音楽の伝統」(Victory Song Tradition) があったとしている。筆者は、これら二つの違いから、手打ち太鼓だけが強調されている女性土偶は、後者を表しているのであり、戦勝祈願と関係していることを指摘した（杉本 2001: 157-158）。

理論的には、土偶に祭儀以外の用法（おもちゃ、死者の表現、教材など）があった可能性も否定できないが⁵⁾、大半の研究者はこれらが呪術か宗教的機能を果たしていたと考えており⁶⁾、現実にはこれらの土偶の半数以上は聖所から出土している (Sugimoto 2005; forthcoming 参照)。鉄器時代の南レヴァントでは、アナト、アシェラ、アスタルテの3女神が旧約聖書に言及されているが⁷⁾、手打ち太鼓奏者土偶はこのうちアスタルテ崇拝と結びつけて理解するの



地図1 手打ち太鼓奏者土偶の出土した遺跡と地域区分

が最善であると筆者は指摘した⁸⁾。アナトは前1千年紀には地名や人名としてしか存在が知られておらず、その崇拜自体が衰退しており、アシェラは基本的に豊饒神で戦神としての性格はほとんど知られていないのに対し⁹⁾、アスタルテは金星と戦争の神であり、前1千年紀にも広く崇拜されていたことが確認されるからである¹⁰⁾。

これらの手打ち太鼓奏者土偶をアスタルテと関連づけることは、その地理的分布からも支持される(地図1参照)¹¹⁾。筆者の作成したカタログ¹²⁾によると、前12-9世紀の全出土例のうち、25点はイスラエル、5点はトランスヨルダン、2点はユダから出土しており、フェニキアとエドムからの出土例は0であるのに対し、前8世紀以降はフェニキアが13点、エドムが7点、トランスヨルダンが8点となっており、イスラエルからは5点、ユダからは2点しか出土していない¹³⁾。これらの土偶分布の中心がイスラエルからフェニキアに移ったことは明確である。これは士師時代から統一王国時代(前12~10世紀)のイスラエルではカナン宗教のさまざまな側面を積極的にヤハウエ礼拝に取り込む作業がなされたと考えられる¹⁴⁾のに対して、分裂王国時代(前9世紀)になるとアスタルテは旧約聖書においても「シドン人の女神」(I王11:5, 33)と呼ばれるようになり、次第にフェニキア人の女神として理解されるようになり、避けられるようになったことと合致している。また、碑文資料からもシドンの王家がアスタルテ崇拜の祭儀を司り、支えていたことが知られている。そのため、イスラエルではヤハウエ宗教が中心的になるのに対し、フェニキアではアスタルテ崇拜がもっとも重要な公的祭儀のひとつとなったと考えられる¹⁵⁾。

さらに、アスタルテと手打ち太鼓の関連については、図像学的にも支持される。たとえば、最近ダン遺跡から出土した青銅製の飾り板には雄牛の上に立つアスタルテ神が描かれており、その手はあきらかに手打ち太鼓を叩いているように描かれている(図2, Biran 1999: fig. 14)。また、シリア・メソポタミアから出土する円筒印章の中にはイシュタル女神が手打ち太鼓とともに描かれる例が複数知られている¹⁶⁾。円盤を持った女性土偶がアスタルテ祭儀と関連した女性を描いたものだとするなら、それらがアスタルテの属性の一部を反映することはもっともなことである¹⁷⁾。

以上のように、女性の手打ち太鼓奏者を象った土偶は、戦神としてのアスタルテを表している可能性が非常に高いが、そのもっとも基本的な根拠は、公的な礼拝における楽団とは別に、凱旋兵士を迎える時に女性が単独で手打ち太鼓を叩く状況があった点にある¹⁸⁾。しかし、もしこの手打ち太鼓を持った女性土偶が単独で存在したものでなく、楽団の一部であったとするなら、これらの土偶は手打ち太鼓のもう一つの用法との関連で理解されなければならないこ



図2 ダン遺跡出土の青銅製飾り板
(Biran 1999: fig. 14)

ととなり、これまでの議論がすべて意味のないものになってしまう。このため、次節においては、鉄器時代の南レヴァントから出土する女性手打ち太鼓奏者土偶が単独のものであり、楽団土偶の一部でないことを確認したい。

2. 南レヴァントおよびキプロスにおける楽師土偶

南レヴァントから出土する手打ち太鼓以外の楽師土偶としては、二枚リードの縦笛及び琴瑟(リラ)奏者の例が知られている。これらに関しては、古代音楽史家のJ. ブラウンが近著『古代イスラエル・パレスチナの音楽』(*Music in Ancient Israel/Palestine* 2002)のなかで詳しく論じているので、その資料を中心に検討したい。

まず縦笛奏者に関してブラウンは7例を挙げているが、このほかアクジブの発掘報告書にも縦笛奏者(但し、二枚リードかどうかは確かでない)と思われる土偶が見られる(Dayagi-Mendel 2002: 149, fig. 7.7)ので、現在の所都合8例の可能性が知られていると言える。具体的には、図3と表1を参照されたい。これらのうち、手打ち太鼓奏者土偶ともっとも似ているのはPD1-3で、身体部分は轆轤で中空の柱状に作られており、長い裾の洋服が表現されている。縦笛は身体の前面中央に両手で構えられており、装身具は少なくともはりつけでは認められない。髪形にはおさげ、短髪、ヴェールのヴァリエーションがある。これらの点は柱状の手打ち太鼓奏者土偶と呼応している。

しかし、これら以外の例は、手打ち太鼓奏者土偶と同列に扱うことが難しい。PD7はこれらの例のうち唯一の板状土偶であるが、ベト・シャン遺跡のかなり遅い層(第1



図3 縦笛奏者土偶及び像

PD1. Dayagi-Mendels 2002, fig. 7.4; PD2. Dayagi-Mendels 2002, fig. 7.7; PD3. Braun 2002, IV.16; PD4. Braun 2002, IV. 17. IV; PD5. Braun 2002 IV. 19; PD6. Braun 2002, IV. 20; PD7. Braun 2002, IV. 18; PD8. Braun 2002, IV. 15.

PD1: アクジブ Akhziv

出土状況: 墓 ZR XXIX

注: 手打ち太鼓土偶 (PP5-7) が近くの墓から出土しているが、同一の墓ではない。

出典: Dayagi-Mendels (2002) fig. 7.4; Braun (2002) 14; Paz (2003) pl. 9:1.

PD2: アクジブ Akhziv

出土状況: 墓 ZRXII (前7-6世紀)

出典: Dayagi-Mendles (2002) fig. 7.7.

PD3: シクモナ Shiqmona

出土状況: “B”市 (前9-8世紀?)

出典: Karageorghis (1987: 17, figs. 2-3); Braun (2002) IV.16.

PD4: アッコ Acco

出土状況: 不明

出典: Braun (2002) IV. 17.

PD5: ホルヴァト・キトミト Horvat Qitmit

出土状況: エドム人の神殿 (ローカス 30), 前7世紀から6世紀初頭

注: 粗雑な作り、底部で他の容器にはりつけられていた?

出典: Beit-Arieh (1995) figs. 3-77, 78; Braun (2002) IV. 19; Paz (2003) pl. 9:3.

PD6: テル・マルハタ Tel Malhata

出土状況: 前7世紀後半 - 6世紀前半

出典: Beit-Arieh (1996) frontispiece, p.4; Braun (2002) IV. 20; Paz (2003) pl. 9:2.

PD7: ベト・シャン Beth Shean

出土状況: I層、ローカス 25 (攪乱?)

注: 板状土偶

出典: James (1966) fig. 115:2; Braun (2002) IV. 18; Paz (2003) pl. 9:2.

PDX: テル・エル・ファラ (北) Tell el-Farah (North)

出土状況: VIIb層 (= 前10-9世紀)、住居 161、ローカス II-158.

注: 土偶ではなく、ファイアンス製護符

出典: De Vaux (1951), pl. XVI. 2-4; Chambon (1984) 75, pl. 63:6; Braun (2002) IV. 15.

表1 縦笛奏者土偶

No.	遺跡	出土状況	時代	製作方法	服装	装身具	髪型	注釈
PD1	アクジブ	墓	前6世紀	中空	着衣	無	短髪	底部ではりつけ、男性像 男性像 板状土偶 ファイアンス製護符、男性像
PD2	アクジブ	墓	前6世紀	中空	着衣	無	短髪	
PD3	シクモナ	B市	前9-8世紀	-	-	-	短いおさげ	
PD4	アッコ	不明	不明	-	-	-	短いおさげ	
PD5	ホルバト・キトミト	祭儀施設	前7,6世紀	-	-	無?	デフォルメ	
PD6	テル・マルハタ	未発表	前7,6世紀	-	裸体?	無?	頭頂に角	
PD7	ベト・シャン	不明	イスラム時代	板状	裸体	有	ヴェールとおさげ	
PDX	テル・エル・ファラ(北)	大型住居	前10-9世紀	護符	裸体?	無	エジプト風	

層=初期イスラム時代)から出土しており、鉄器時代の土偶であるとは断定できない¹⁹⁾。また、テル・エル・ファラ(北)遺跡出土の例(PDX)は土偶でなく、ファイアンス製でエジプトの護符の様式で作られている。PD5, 6もおそらく独立した土偶でなく、底部で大型の土器などにはりつけられた小型の胸像(トルソ)だったと考えられる。このため、南レヴァントから出土した縦笛奏者像としてはたしかに8例知られているが、そのうち3例は土偶でなく、1例は年代的に問題があるので、手打ち太鼓奏者土偶と比較できるような例は実際には4例(二枚リードでないかもしれないものを含めて)しか存在していないことがわかる。

これらの縦笛奏者像のうち、いくつかは手打ち太鼓奏者土偶とともに用いられた可能性がある。PD1, 2は手打ち太鼓奏者の土偶が見つかったアクジブの同じ墓域から出土しており²⁰⁾、PD5の小型胸像も手打ち太鼓土偶の知られているホルバト・キトミトの「神殿」から出土しているからである。しかし、これらの少なくともいくつかはあきらかに男性の楽師を描いており(PD5, 6, 8; PD1, 2も男性?)、8例ともすべてフェニキアかエドムの前7世紀以降の遺構から出土している²¹⁾。

竖琴奏者の像に関して言うと、鉄器時代の南レヴァントから2例知られているが(図4、表2参照)、これらも手打ち太鼓奏者土偶のような独立した土偶であったかは確かでない。PL1は、手打ち太鼓奏者土偶と縦笛奏者の胸像とともにホルバト・キトミトのエドム人神殿から出土したものであるが、これには片手の先と竖琴の弦のごく一部が残っているだけで、これだけから全体像を推測することは不可能である(図4、PL1; Beck 1995: 162, figs. 3, 109-110)。もちろんこれが手打ち太鼓奏者の土偶と同じような土偶であった可能性を完全に排除することはできないが、少なくとも同じ遺構から発見されている縦笛奏者は独立した土偶ではない。もう一つの竖琴奏者の像は、アシユドド遺跡から出土したものであり(PL2, M. Dothan 1971: fig. 62:1, pl. LX:1)、これはあきらかに独立した土偶ではなく、

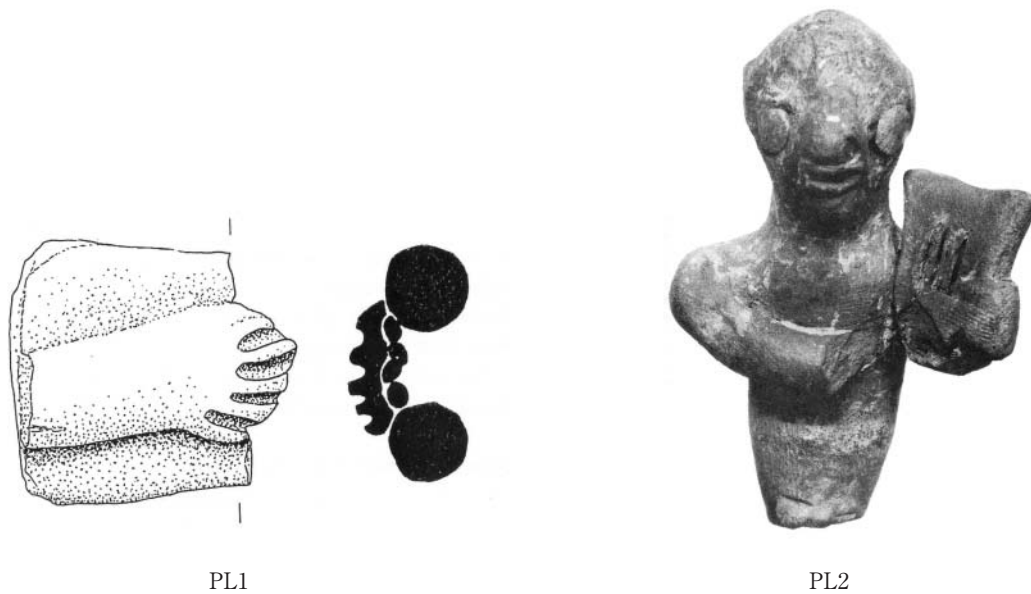
縦笛奏者像にも見られるとおり、胸から下の部分で他の土器に接合された小型の胸像の一部である。

筆者の編纂した鉄器時代の手打ち太鼓土偶のカタログには99例が挙げられているが、縦笛奏者像に関しては土偶以外のものも含めて8例(鉄器時代の土偶だけなら4例)しか知られておらず、竖琴奏者像に関しては2例(確実に鉄器時代の土偶と言えるものは皆無)しか知られていない。結果として、手打ち太鼓土偶の数は他の楽師土偶の数を圧倒しており、これらがすべて楽団の一部であったと考えることはできない。

鉄器時代I期以来、南レヴァントに祭儀用の楽団が存在したことは、聖書の記述²²⁾やアシユドド遺跡から出土した楽師のはりつけられた祭儀台(図5、Dothan and Ben-Shlomo 2005: figs. 3.76-78)、フェニキアの金属製装飾鉢²³⁾などからあきらかである。しかし、他の種類の楽師土偶に比べて圧倒的に多数の手打ち太鼓土偶が存在することは、これらの土偶が南レヴァントにおいて祭儀用楽団とは別に用いられる環境があったことを示している。

一方、前7世紀のフェニキアとエドムでは多少状況に変化が見られ、女性の手打ち太鼓土偶が依然圧倒的な優位にあるものの、他の楽器や男性の土偶が同じコンテキストから出土するようになる。小型の胸像や護符などが土偶とどのような関係にあったかはよくわからないが、これらにおいても他の楽器の例が見られるようになる。おそらく女性の手打ち太鼓奏者は独立で戦神としてのアスタルテ祭儀に用い続けられる一方で、楽団を用いた祭儀とも関係し始めた可能性を示すものと思われる。但し、このような状況は、イスラエル、ユダ、トランスヨルダンではまったく確認できない。

さらに、キプロスにおいては、前6世紀以降のコンテキストからさまざまな種類の楽師土偶が大量に出土することが知られている。手打ち太鼓以外には、竖琴、縦笛、パンの笛、シンバル奏者の土偶が知られており、少なくともそのうちの一部は男性の楽師(手打ち太鼓奏者も含めて)で



PL1

PL2

図4 豎琴奏者像

PL1. Beck 1995, fig.3; PL2. Braun 2002, IV.33

PL1: ホルヴァト・キトミト

出土状況：エドム人の神殿, locus 44 (前7世紀 - 6世紀初頭)

出典：Beck (1995) fig. 3. 109.

PL2: アシュドド

出土状況：Area D, locus 1062 (ビザンツ時代の水溜の床、鉄器時代Ⅱ期?)

注：独立した土偶ではなく、おそらくなんらかの器にはりつけられていた

出典：Dothan, M. (1971) fig. 62:1; pl. LV:1; Braun (2002) IV. 33.

表2 豎琴奏者土偶

番号	遺跡	出土状況	時代	製作方法	服装	装身具	髪型?	注釈
PL1	ホルヴァト・キトミト	神殿	前7, 6世紀	-	-	-	-	手と楽器の一部のみ
PLX	アシュドド	不明	鉄器時代Ⅱ期?	手づくね	着衣?	無し	彩色	大型土器の一部? 男性像

ある²⁴⁾。たとえば、この時期のキプロスの女性土偶のカタログである J. カラゲオルギス (J. Karageorghis) の *The Coroplastic Art of Ancient Cyprus, V (B). The Cypro-Archaic Period Small Female Figurines* (1999: 191-212) には、南レヴァントで見られるのと同じような様式の手打ち太鼓奏者土偶が8例挙げられているが、同じ手打ち太鼓奏者の土偶でも様式の異なるものが29例記録されている(図6)²⁵⁾。豎琴奏者は61例知られており、パンの笛奏者は14例挙げられており²⁶⁾、これらの多くは同じ遺跡から出土している。また、同じ時期の男性土偶を扱った V. カ

ラゲオルギスのカタログ(1995)では、豎琴奏者が8例、縦笛奏者が9例、シンバル奏者が14例、手打ち太鼓奏者が5例挙げられている²⁷⁾。

あきらかに前6世紀のキプロスにおける楽師土偶の状況は、前7世紀以前の南レヴァントの状況とは異なっており、女性の手打ち太鼓奏者だけが特別積極的に用いられていたとは言えない。これらはむしろいくつか組み合わせられて楽団を表現していたと考えられ、男性奏者と女性奏者の例をとともに認めることができる。フェニキアでは、すでに前7世紀に他の楽器奏者の土偶が現れ始め、手打ち太鼓奏者

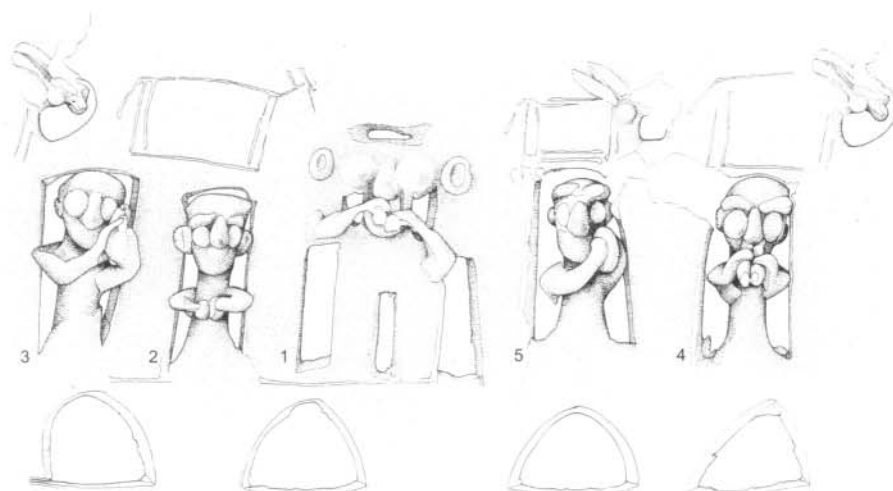


図5 アシュドド出土の祭儀台
Dothan and Ben-Shlomo 2005: fig. 3.76, 78



図6 キプロス出土の手打ち太鼓奏者土偶

- a. 南レヴァントと同型式の手打ち太鼓奏者土偶 (J. Karageorghis 1991: cat. VI (iii) 48);
- b. 南レヴァントと異なる型式の手打ち太鼓奏者土偶 (ibid. 1991: cat. VI (iii) 44).



図7 フェニキアの豊饒祭儀モデル
V. Karageorghis 1995: cat. III (1) 4.

土偶とともに用いられる例が知られている。おそらく前6世紀のキプロスの現象は、前7世紀のフェニキアで始まった傾向がさらに発達した状況を反映していると考えられるであろう²⁸⁾。

結論

以上の分析から、手打ち太鼓奏者の土偶はイスラエル、ユダとフェニキア、エドム（とおそらくトランスヨルダン）²⁹⁾で異なった発達を遂げたことがあきらかである。イスラエルでは手打ち太鼓奏者土偶は前12～10世紀に数多く見られるが、他の楽器奏者の土偶はまったく知られておらず、前9世紀の間に手打ち太鼓奏者土偶の土偶そのものも減少し始める。ユダでは、手打ち太鼓奏者土偶の数も元来多くなく、その他の楽器奏者の土偶も出土していない。これは、初期のイスラエルとユダでは、元来アスタルテと関連していた戦勝祈願の習慣を取り入れるために手打ち太鼓奏者土偶が用いられたのに対し、ヤハウエー神教の排他的な動きが強まるにつれてアスタルテとの関連を感じさせるこれらの土偶そのものの用法が減少したことを示していると考えられる。

これに対して、フェニキア及びその影響下にあった地域（エドム、トランスヨルダン、キプロス）では、手打ち太鼓奏者土偶が増加するだけでなく、他の楽師土偶と併用されるようになっていく。これは、元来アスタルテの戦神としての側面と関係していた手打ち太鼓奏者土偶が、その性格を変え、より大規模な楽団を用いた祭儀音楽と関係していくことを示していると思われる。イスラエル、ユダと異なり、フェニキアではアスタルテ崇拝は王室の公式祭儀として発達したので、大規模な楽団を用いた祭儀も発展した

のであろう。また、アスタルテは、アナト、アシェラなどそれ以外の女神のさまざまな側面を吸収し、後のフェニキアではあきらかに豊饒女神としての性格も持つようになるので³⁰⁾、ヘレニズム期以降のキュベレのようなオーケストラを伴った恍惚的豊饒祭儀を含むようになった可能性もある。

註

- 1) 「南レヴァント」という句は、古代イスラエル、ユダ、アンモン、モアブ、エドムの各国家及び、ペリシテ、フェニキアの都市国家が存在した地域を指す意味で使用される。現代の地名では、イスラエル、ヨルダン、レバノン及びパレスチナ自治区を含むことになるが、政治的意図を排除するためにこの句を用いている。
- 2) 杉本智俊 (2001)、Sugimoto (2002, 2005, forthcoming) 参照。円盤を持った女性土偶には、板状のもの、柱状のものがあり、髪型、服装、装身具、円盤の大きさ、構え方などにヴァリエーションがあるが、筆者はこれらのすべてが同一の型式に属するものと考えている (杉本 2001: 141-153)。一般に青銅器時代、鉄器時代の南レヴァントから出土する女性土偶は、円盤を持った型式のものに限らず、ウガリト文書などのカナン神話から知られる女神と関連づけられ、アスタルテ土偶、アシェラ土偶などと呼ばれることが多い。しかし、この同定は十分な遺物の検討なしになされることが多く、専門家の間でも合意は得られていない。
- 3) 古代音楽の研究者たちは、英語で “frame-drum” という語を一般に用いている。「手打ち太鼓」という訳語は、小板橋氏 (1997) の用例に倣っている。
- 4) 以下の議論参照。
- 5) 例えば、ファウラー Fowler (1985) は、これらが「おもちゃ」であった可能性も否定できないとして、土偶の存在から即遺構を宗教的に解釈することに警告を発している。しかし、ファウラー自身、これらが宗教的遺物であることを否定した訳ではない。ヴォイクト (Voigt 1983) は、新石器時代のイランの土偶を研究するにあたって土偶の持ちうる機能として、おもちゃ、教材、死者の表現、呪術用具、宗教で用いる神像の5つの可能性を指摘しており、南レヴァントの土偶の研究者である R. クレッターはこの分類を援用している (Kletter 1996: 20-21, 73-81)。しかし、これらのうち、最初の3つの可能性を具体的な土偶に関して主張する研究者はほとんどいない。
- 6) これまで南レヴァントから出土した土偶は、Pilz (1924)、Pritchard (1943)、Holland (1975)、Engle (1979)、Kletter (1996) によって編纂されてきた (円盤を持った女性土偶に関しては、筆者までカタログは作られていなかった) が、これらの編纂者たちは全員南レヴァントの女性土偶が呪術か宗教的機能を持っていたという見解で一致している。
- 7) これらの土偶には、角や冠など青銅器時代の土偶に見られるような神性を典型的に示す象徴は認められず、おそらく人間の女性を描いたものと思われるが、それでも何らかの形で公式の女神崇拝と関連していた可能性が高い。人間の女性が戦勝を導くために特別な力を発揮できることが明確でない上、これらの土偶の半数以上は宗教的な遺構から出土しており、公式の礼拝と接点を持っていたことを示しているからである (筆者作成のカタログ [杉本 2001; Sugimoto 2005, forthcoming] を参照)。また、鉄器時代Ⅱ期以降、南レヴァント全域で女神や神の属性が人間の姿で描かれる傾向があることがすでに知られている (Keel

and Uelinger [1998] 6章参照) ので、おそらくこれらの土偶は、礼拝者や巫女など女神崇拝を象徴する人間の女性を描いたものだと考えられる。

- 8) 旧約聖書には、これらの3女神以外に「天の女王」が言及されている (エレミヤ書 7, 44 章) が、これはアスタルテかイシュタル崇拝の特殊な形、あるいはそれらが混交したものと一般に考えられており、それ以外の女神の記述はない。フェニキア語など他の前1千年紀の碑文資料からもせいぜい10程度の女神が知られるだけである。このため、イスラエルはもちろんその周辺地域においても、青銅器時代のウガリト文書のように何百もの神々が礼拝される状態ではなかったとすることができる (Smith 2002: 64, 182-183 も参照)。イスラエルにこれらの3女神以外のマイナーな女神が存在した可能性も完全に否定できないが、青銅器時代に比べるとはるかに低いと考えられる。また、手打ち太鼓奏者土偶がこの地域全域に広がっていることから、マイナーな地域的女神と関係しているとは考えにくい。
- 9) アナトは、前1千年紀にはアスタルテに吸収されたものと思われる (Wyatt 1999: 205 参照)。アシェラが前1千年紀に独立した女神として存在していたかどうかは、激しく議論されている。論点の一つは、聖書中のアシェラという語が常に祭儀用具としての聖木を意味して、女神を意味しなくなっていたのかどうかと言う点であり、もう一つはクンティレット・アジュルドやヘルベト・エル・コムから出土した碑文の「ヤハウエとそのアシェラ」という表現がヤハウエの配偶神としての女神の存在を示すのかと言う点である。アシェラを独立した女神と考える学者には Olyan (1988)、Ackerman (1992)、Binger (1997)、Wyatt (1999)、Hadley (2000)、J. Day (2001)、Zevit (2001)、Dever (2005) がおり、すでに女神として存在していなかったと考える学者には Tigay (1986)、McCarter (1987)、Frevel (1995)、Emerton (1999)、Korpel (2001)、Smith (2002) がいる。スミス (2002: 128-29) はアシェラもアスタルテに吸収された可能性を論じている。もし後者の意見が正しいとすると、前1千年紀のイスラエルで実質上女神として機能していたのはアスタルテだけということになる。一方、アシェラが独立した女神として存在していたとしても、基本的にアシェラは豊饒神であり、戦争を司る女神ではなかったので手打ち太鼓土偶との関連性は低いと言える。
- 10) ウガリト文書においても、前1千年紀前半のレヴァントにおいても、アスタルテの豊饒神としての性格が強調されている証拠はほとんど見られない。しかし、アスタルテが、メソポタミアのイシュタルと関連しており、後のヘレニズム時代にアタルガティス、キュベレへと発展したことを考えると、その性格がまったくなかったとは言えない。おそらく前1千年紀前半の南レヴァントにはまだアシェラの影響が残っていたため、その側面にはあまり焦点が当てられず、戦争と天空の神としての側面が強調されていたのかもしれない。しかし、鉄器時代も末期になると、アスタルテに様々な女神が融合してゆき、再び豊饒神的な性格も持つようになったのではないと思われる。申命記 7 :13; 28: 4, 18, 51 で ‘asterôt という語が動物の繁殖の意味で用いられている箇所は、旧約聖書中唯一アスタルテが豊饒と関係づけられる可能性がある所であるが、時代的には捕囚期以後の用例と考えるべきであろう。
- 11) 地理的区分は、イスラエル、ユダがそれぞれの王国の領土、フェニキアがその都市国家群の存在した範囲を指すこととした。トランスヨルダンにはアンモン・モアブの領土を合わせた地域 (ヤルムク川からワディ・ハサまで) が含まれている。エドムは、前8世紀以降ネゲヴ砂漠地域 (ホルヴァト・キトミト周辺)

- に通商路を広げており、この地域の遺跡にはユダだけでなくエドムの影響が見られる (Bienkowski and van der Steen, 2001 参照) ので、元来のエドム領 (ワディ・ハサ以南、アラバの谷以東) とともにここも「エドム」に含めることとした。
- 12) 杉本 2001; Sugimoto 2005, forthcoming 参照。より完全な形のカタログは、現在別の形で出版するために準備中である。
- 13) トランスヨルダンがフェニキアの強い影響下にあったことは、Homés Fredericq (1987) が指摘している。エドムとフェニキアの関係については、Finkelstein (1992) を参照されたい。
- 14) この現象を J. Day (2001) は “appropriation”、Smith (2002) は “convergence” と呼んでいる。考古学的にも、青銅器時代のカナン宗教との関連を示す祭儀台、神殿モデル (Beck, 1994) や雄牛像 (杉本, 2004) は、前 12-9 世紀までに集中して現れ、それ以降はほとんど見られなくなることが指摘されている。聖書の士師記 6 章の物語は、カナンのパアル神殿がヤハウェの神殿に取り込まれた事件を記しており、Stager (1999) もシェヘムの塔の神殿が同様な経過をたどった可能性を考古学的に論じている。このような状況下で、アスタルテの戦勝祈願の習慣がヤハウェの枠組みに取り込まれたことは十分考えられ、手打ち太鼓土偶の機能もその枠組みで考えるべきかもしれない。実際、旧約聖書は手打ち太鼓との関連でアスタルテへの言及を避けており、ヤハウェと直接結びつける例 (イザ 30:32; 詩 68: 26) もいくつか見られる。
- 15) 例えば、シドン出土の Tabnit 王の棺の碑文 (前 6 世紀末) は、王がアスタルテの神官であったことを語っており、その息子 Eshmunazar の棺の碑文 (前 5 世紀初頭) は、彼の母親がアスタルテの女神官であったことを述べている。これらの碑文は、シドンの王室が公式にアスタルテ祭儀を支持していたことを示しており (Wyatt, 1999: 207 参照)、上述の列王記の記述とも合致する。また、キプロスのフェニキア人遺跡キティオンでは、大型のアスタルテ神殿が発掘されている。
- 16) 例えば、D. Collon, (1982: 74, no. 47)、Winter (1987²: 111, fig. 520)、Keel and Uelinger (1990: 24, illust. 13) 参照。
- 17) 後期青銅器時代のアスタルテのもっとも典型的な図像は、武器を持った女性の姿である (Cornelius, 2004) が、鉄器時代 II 期になると、女神自身でなく、その祭儀と関係した人間の女性像が描かれるようになるので、その図像表現が変化しても不思議ではない。
- 18) 聖書はこの現象がアスタルテ女神と関連していたことへの言及をさげ、ヤハウェ信仰のコンテキストの中で語っているが、それ以外の証拠 (前 12 ~ 10 世紀のイスラエルの宗教的環境、この種の土偶の地理的分布、図像学的証拠) から元来この行為がアスタルテ崇拝と関連したものであったことを知るができる。
- 19) 土偶の型式からすると、イスラム時代よりは古い可能性もあり、層位に混乱があったのかもしれないが、この種の板状土偶はローマ時代などからも知られている。
- 20) PD2 は、手打ち太鼓土偶 (PP3, Sugimoto 1995, forthcoming) と同じ墓から出土している。
- 21) シクモナの例だけは一応前 9 ~ 8 世紀となっているが、この年代は不確実である。
- 22) 例えば、I サム 10:5; II サム 6:5; I 歴 13:8; 詩 68:26, 81:3, 149:3, 150:4 参照。
- 23) フェニキアの金属製装飾鉢については、Markoe (1985) がカタログを作成し、分析している。
- 24) キプロス出土の男性の手打ち太鼓奏者土偶の例については、V. Karageorghis の「男性小像」のカタログ (1995) 参照。具体例は、以下の通り。 Cat. I (vii) 9 = pl. XX.3; I (vii) 13 = XX 5; I (vii) 16 = XX 9; I (vii) 17 = XX 10; I (vii) 18 = XX 11; I (vii) 19 = XX 12。同じカタログ内のシンバル奏者は、両側から楽器の真ん中を支えているが、手打ち太鼓奏者は男性でも南レヴァントの円盤を持った柱状土偶と同じ楽器の構え方をしており、はっきりと区別することができる。
- 25) 南レヴァントで見られるのと同じ様式の手打ち太鼓奏者土偶は、J. Karageorghis (1999) のカタログの VI (ii) 41, (iii) 45, 47, 48, 49 (=X [vii] 121), (v) 52, 53, 54。それと異なる構え方をした土偶のうち 28 例は、片手で手打ち太鼓を持ち、もう片方の手は楽器にふれていない。具体的には、同じカタログの VI (i) 3, 4, (ii) 8, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 32, 33, 35, 36, 40, 44, (iv) 50, 59 がそれにあたる。さらに 1 例片手で楽器を持ち上げている例がある ((ii) 43)。カラゲオルギスは全部で 59 例手打ち太鼓奏者土偶があるとしているが、本稿では図版によって構え方を確認できるもののみを数えている。それでも、少なくとも半数以上の例は、南レヴァントの手打ち太鼓土偶とは構え方が違うということができる。
- 26) 堅琴奏者の例は、同じ J. Karageorghis のカタログの第 8 章に挙げられている。パンの笛奏者の例は同じく第 7 章の “figurines porant un objet non identifié, probablement un instrument de musique (flûte?)” に挙げられているが、楽器の形状からパンの笛であることに間違いのないと思われる。
- 27) 男性の堅琴奏者の例で図版のあるものは、V. Karageorghis (1995) のカタログ番号 I (v) 1-8、縦笛奏者は I (vi) 1-9、シンバル奏者は I (vii) 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 14, 15 がそれぞれ該当する。手打ち太鼓奏者の例については、注 23 参照。
- 28) フェニキアの祭儀で楽団が用いられていたことについては、Markoe (1985) による金属製鉢の研究や豊饒祭儀の場面とされるキプロス出土の土製モデル (V. Karageorghis 1995: Cat. III (1) 3, 4, 5, 7, 9; 図 7) を参照。鉢の図案では縦笛奏者が常に先頭であり、モデルでは輪になって踊る人々の中心に縦笛奏者がいることが多い (図 7 参照)。
- 29) トランスヨルダンでは、他の音楽家土偶の例は知られていないが、手打ち太鼓奏者土偶の数自体は増加しており、両性具有土偶など手打ち太鼓奏者土偶の別の形のヴァリエーションが見られるようになる。
- 30) 註 9 参照。

引用文献

- Ackerman, S. 1992 *Under Every Green Tree: Popular Religion in Sixth Century Judah*. Atlanta, Scholars Press.
- Beck, P. 1990 The Cult Stands from Tacanach: Aspects of the Iconographic Tradition of Early Iron Age Cult Objects in Palestine. In I. Finkelstein and N. Na'aman (eds.), *From Nomadism to Monarchy*, 417-446. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Beck, P. 1995 Catalogue of Cult Objects and Study of the Iconography. In I. Beit-Arieh (ed.), *Horvat Qitmit: An Edomite Shrine in the Biblical Negev*, 27-197. Tel Aviv, The Institute of Archaeology.
- Beit-Arieh, I. 1995 *Horvat Qitmit: An Edomite Shrine in the Biblical Negev*. Tel Aviv, The Institute of Archaeology.
- Beit-Arieh, I. 1996 Edomite Advance into Judean-Israelite Defensive Fortress Inadequate. *Biblical Archaeology Review (BAR)*: 22-38.
- Bienkowski, P. and E. van der Steen 2001 Tribes, Trade, and Towns: A New Framework for the Late Iron Age in Southern Jordan and the Negev. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research (BASOR)* 323: 21-47.

- Binger, T. 1997 *Asherah: Goddess in Ugarit, Israel and the Old Testament*. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Biran, A. 1999 Two Bronze Plaques and the Huššot of Dan. *Israel Exploration Journal (IEJ)* 49: 43-54.
- Braun, J. 2002 *Music in Ancient Israel/Palestine: Archaeological, Written, and Comparative Sources*. trans. D. W. Scott, Grand Rapids, MI, Eerdmans.
- Chambon, A. 1984 *Tell el-Far'ah. L'Age du Fer*. Paris, J. Gabalda.
- Cornelius, I. 2004 *The Many Faces of Goddess: The Iconography of the Syro-Palestinian Goddesses Anat, Astarte, Qedeshet, and Asherah c. 1500-1000 BCE* <Orbis Biblicus et Orientalis (OBO) 204>. Fribourg Academic Press/Göttingen Vandenhoeck & Ruprecht.
- Day, J. 2001 *Yahweh and the Gods and Goddesses of Canaan* (JSOTS 265). Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Dayagi-Mendels, M. 2002 *The Akhziv Cemeteries: The Ben-Dor Excavations, 1941-1944*. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- De Vaux, R. 1951 La troisième campagne de fouilles à Tell el-Far'ah, près Naplous. *Revue Biblique (RB)* 58: 393-430.
- Dever, W. G. 2005 *Did God have a Wife? Archaeology and Folk Religion in Ancient Israel*. Grand Rapids, MI, Eerdmans.
- Dothan, M. 1971 Ashdod II-III: The Second and Third Seasons of Excavations 1963, 1965. *'Atiqot* 9-10.
- Dothan M. and D. Ben-Shlomo 2005 *Ashdod IV: The Excavations of Area H and K (1968-69)*. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Emerton, J. A. 1999 'Yahweh and his Asherah': the Goddess or Her Symbol? *Vetus Testamentum (VT)* 49: 315-37.
- Engle, J. R. 1979 *Pillar Figurines of Iron Age Israel and Asherah/Asherim*. Ph. D. Dissertation, Pittsburgh University.
- Finkelstein, I. 1992 *Horvat Qitmit and the Southern Trade in the Late Iron Age II*. *Zeitschrift des Deutschen Palastina-Vereins (ZDPV)* 108: 156-70.
- Fowler, M. D. 1985 Excavated Figurines: A Case for Identifying a Site as Sacred? *Zeitschrift für die Alttestamentliche Wissenschaft (ZAW)* 97 (1985): 333-344.
- Frevel, C. 1995 *Aschera und der Ausschliesslichkeitssprach YHWHs* (BBB 94), 2 vols. Weinheim, Belz Athenäum.
- Hadley, J. M. 2000 *The Cult of Asherah in Ancient Israel and Judah: Evidence for a Hebrew Goddess*. Cambridge University Press.
- Hillers, D. R. 1970 The Goddess with the Tambourine. *Concordia Theological Monthly* 41: 606-19.
- Holland, T. A. 1975 *Typological and Archaeological Study of Human and Animal Representations in the Plastic Art of Palestine*. Ph. D. Thesis, Oxford University.
- Homés Fredericq, D. 1987 Possible Phoenician Influences in Jordan in the Iron Age. *Studies in the History and Archaeology of Jordan (SHAJ) III*: 89-96.
- James, F. W. 1966 *The Iron Age at Beth Shean: A Study of Levels VI-V*. Philadelphia, The University Museum.
- Karageorghis, J. 1999 *The Coroplastic Art of Ancient Cyprus V (B). The Cypro-Archaic Period Small Female Figurines*. Nicosia, A. G. Leventis Foundation.
- Karageorghis, V. 1987 The Terracottas. In V. Karageorghis and O. Picard (eds.), *La nécropole d'Amathonte Tombs 113-367 II. Céramiques non-chypristes*, Nicosia.
- Karageorghis, V. 1995 *The Coroplastic Art of Ancient Cyprus IV. The Cypro-Archaic Period Small Male Figurines*. Nicosia, A. G. Leventis Foundation.
- Kletter, R. 1996 *The Judean Pillar figurines and the Archaeology of Asherah*. BAR International Series 636, Oxford.
- Keel, O. and Uelingner, C. 1998 *Gods, Goddesses, and Images of God in Ancient Israel*. Mineapolis, Fortress.
- Korpel, M. C. A. 2001 Asherah Outside Israel. In B. Becking et al. (eds.), *Only One God?*, 127-50.
- Markoe, G. 1985 *Phoenician Bronze and Silver Bowls from Cyprus and the Mediterranean*. University of California Publications, Classical Studies 26, Berkeley and Los Angeles, University of California.
- Mazar, E. 2001 *The Phoenicians in Achziv: the Southern Cemetery, Jerome L. Joss Expedition, Final Report of Excavations 1988-90* (Publicaciones del laboratorio de Arqueología). Barcelona, Universidad Pompeu Fabra de Barcelona, Carrera Edició.
- McCarter, P. K. 1987 Aspects of the Religion of the Israelite Monarchy: Biblical and Epigraphic Data. In P. D. Miller, Jr., P. D. Hanson, and S. D. McBride (eds.), *Ancient Israelite Religion*, 137-155. Philadelphia, Fortress.
- Olyan, S. M. 1987 Some Observations concerning the Identity of the Queen of Heaven. *Ugarit- Forschungen (UF)* 17: 161-174.
- Olyan, S. M. 1988 *Asherah and the Cult of Yahweh in Israel* (SBLMS 34). Atlanta, GA, Scholars Press.
- Ornan, T. 2001 Ištār as Depicted on Finds from Israel. In A. Mazar with G. Mathias (ed.), *Studies in the Archaeology of the Iron Age in Israel and Jordan*, 235-52. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Paz, S. 2003 *Drums, Women and Goddesses: Drumming and its Meaning in Iron Age II Israel in Light of the Archaeological Finds*. MA Thesis, Tel Aviv University (in Hebrew).
- Pilz, E. 1924 Die weiblichen Gottheiten Kanaans. *ZDPV* 47 (1924): 131-68.
- Poethig, E. B. 1985 *The Victory Song Tradition of the Women of Israel*, Unpublished Ph. D. Dissertation. Union Theological Seminary, New York.
- Pritchard, J. B. *Palestinian Figurines in Relation to Certain Goddess known through Literature*. AOS 24, New Haven.
- Smith, M. S. 2002 *The Early History of God: Yahweh and the Other Deities in Ancient Israel*. Michigan, Eerdmans.
- Stager, L. E. 1999 The Fortress-Temple at Shechem and the 'House of El, the Lord of the Covenant'. In P. H. Williams, Jr. and T. Hiebert (eds.), *Realia Dei: Edward F. Campbell Festschrift*, 228-49. Atlanta GA, Scholars Press.
- Sugimoto, D. T. 2002 Female Figurines with a Disc from Palestine: A Typological Study. Oral Presentation at American Schools of Oriental Research (ASOR) 2002 Annual Meeting. Toronto, Canada.
- Sugimoto, D. T. 2005 Female Disc-Holding Figurines from Palestine: An Analysis of their Archaeological Contexts. XIXth World Congress of the International Association for the History of Religions (Takanawa Prince Hotel, Tokyo, March 28th).
- Sugimoto, D. T. Forthcoming Female Figurines with a Disk from Palestine: An Analysis of their Archaeological Contexts. *Annual of the Japanese Biblical Institute (AJBI)*.
- Tigay, J. H. 1986 *You Shall Have No Other Gods: Israelite Religion in the Light of Hebrew Inscriptions* (HSS 31). Atlanta GA, Scholars Press.
- Voigt, M. M. 1983 *Hajji Firuz Tepe, Iran: The Neolithic Settlement* (Hasanlu Excavation Reports, vol. 1). Pennsylvania, The University Museum.
- Winter, U. 1987 *Frau und Göttin. Exegetische und ikonographische Studien zum weiblichen Gottesbild im Alten Israel un in dessen Umwel*. OBO

- 53, Freiburg, Universitätsverlag/ Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Wyatt, N. 1999 Asherah. In *Dictionary of Deities and Demons in the Bible*.
K. van der Toorn, B. Becking, and van der Horst P. W. (eds). (2nd
extensively revised edition), 99-105. Leiden, Brill/ Grand Rapids:
Eerdmans.
- Zevit, Z. 2001 *The Religion of Ancient Israel: A Synthesis of Parallactic
Approaches*. New York, Continuum.
- 小板橋又久 1997『古代オリエントの音楽：ウガリトの音楽文化に
関する一考察』リトン。
- 杉本智俊 2001「円盤を持った女性土偶－その性格と機能」『史学』
70-3/4号、135-170頁。
- 杉本智俊 2004「古代レヴァントの雄牛像－表象理解への一試論」
『時空を超えた対話－三田の考古学』六一書房、263-269頁。

杉本 智俊

慶應義塾大学

David T. SUGIMOTO

Keio University